

われわれからすれば、そこにドイツ観念論的な、きわめて観念的な思惟方法をみるわけであるが、その範囲においては合理的思惟による普遍妥当性を求める線に沿いつつ宗教把握がおこなわれたことを銘記せねばならぬ。

以上は、「組織仏教学」の、ほんの序論を

奈良康明著

## 『仏教史Ⅰ—インド・東南アジア—』

岡部 和雄

紹介したにすぎないが、紙数もほぼ限界にきたので、博士一流の達筆な、現代のわれわれにとって誠に難読なノートを整理された労苦を多としながら、いちおう攷筆することとする。(未完)

本書が刊行されて間もない今年の二月ごろ三康文化研究所で、著者を囲んでの合評会が開かれ出席した。集まったのは石上善応（大正大）、小西正捷（法政大）、塚本啓祥（立正大）、津田真一（東方学院）、山崎元一（国学院大）の各氏で、それぞれ専門家の立場から批評や感想、意見が述べられた。ここで交された議論はいうまでもなく多岐にわたっていたが、誤字・誤植・表記の適否などを含め比較的細かな問題に集中し、著者が本書で提示

した立場や方法についての異論や批判は、私の記憶するかぎりあまり出なかったように思う。いつもは口の悪い津田氏が、本書は抵抗を感じずに通読できたと述懐したことも印象的だった。教理中心の仏教史ではなく、文化史として仏教史を叙述したいという著者の意図は、本書によって基本的には達成されたというのが出席者のほぼ一致した見解だったのではないかと思われる。

ところで戦後の日本におけるインド仏教の研究が、とくに教理学、教理史研究の面で飛躍的進展をとげたことは周知のことである

が、教団史や社会史という新しい視角から仏教を捉えなおそうとする試みもいくつか現れた。また仏教遺跡の考古学的発掘・調査にもめざましい成果があいついだ。『アジア仏教史・インド編』（I-VI、佼成出版社、昭和48—50）はこうした近來の学的成果をできるかぎり取り入れ、一三名の学者（中村元・山口恵照・藤田宏達・菅沼晃・桜部建・静谷正雄・勝呂信静・金岡秀友・黒柳恒男・土井久弥・岩本裕・佐々木教悟・藤吉慈海）が分担執筆して六冊にまとめたものである。通史としては叙述の一貫性にやや難点があるが、これまで日本語で書かれたインド仏教史の中でもっとも大部なものである。また、ひとりの著者によって完成された最近の仏教史としては、平川彰著『インド仏教史』（上下二巻、春秋社、昭和49・54）がある。これは著者自身の創見をも含む戦後のインド仏教研究の諸成果を集大成した名著である。仏教史の流れを原始仏教、部派仏教、初期の大乗仏教、後期の大乗仏教、秘密仏教の五章に分ち、一貫した流れとして追求し、よくバランスのとれた論述がなされている。仏教教理の展開過程にはとくに意を用いているが、教理偏重に陥っていないのは、社会や教団の歴史動的

向にも注意をはらい、適正な叙述がなされているからである。上巻下巻合わせて八百頁を越す本書は、教理史の観点から見ても、教団史的観点から見ても、従前のインド仏教史をはるかに凌駕する豊かですぐれた内容を具えており、わかりやすい平明な叙述と相俟って、今後永く標準的なインド仏教史として読みつがれていくことであろう。

## 二

さて、奈良氏は合評会の席上、この平川彰著『インド仏教史』を引きあいに出し、本書がまさしく名著の名い値することは十分承認しながらも、氏自身が書きたい仏教史とは性格が異るとし、これとは違うタイプの仏教史をめざしたという。ここに奈良氏の「文化史の立場からインド仏教史を叙述する」(二頁)という独自の立場・方法が認められる。著者は「あるべきすがたとしての理想はそれなりに尊重しつつも、現実には生きていく人々の実態が知りたい。いかなれば、建前と本音の両者を合したトータルな形で、仏教徒の文化をみてみたい」(二頁)といい「前者のみならず教理学、教理史で扱えるし、後者は民俗学や民族学の分野である。しかし、両者を統合す

るところに文化史の課題がある」(二頁)とする。このような研究は果して可能であるかといえ、「南方仏教の実態なら、その国へ出かけて行って実地調査することができ。事実、少なからぬ研究があり、分析の理論枠も種々に論じられている。しかし古代インドの実地調査はできない。やむなく現在にまで残されている文献を新たな興味と関心のもとに再検討し、加うるに考古学や美術史、歴史学、人類学などの助けを借りなければならぬ」(二頁)という。このような研究がきわめて困難で、種々の資料的制約をも伴っていることは十分想像される。しかしそれを恐れて手を拱いては仏教徒の本音の部分がいつまでも不問に付されることにならう。著者が、従来の文献学的研究に加えて、隣接諸科学の援用を必須としていることから考えても、永い仏教の歴史を文化史の立場から一貫して叙述することが至難でなかった筈はない。著者はかつて数年間インドに滞在し、インドの自然や社会、文化を肌で体験している。また駒沢大学では「インド仏教文化史」の講義をずっと担当し、この方面の研究には多くの蓄積があり、関連の著書、論文も少なくない。著者の立場や方法はこの十数年の間に徐

々に形成され深められてきたものである。したがって『仏教史I』は現段階における著者の研究の集大成であり、書かれるべくして書かれた仏教史ということになるであろう。

## 三

本書の構成はつぎのようになっている。  
序章 インド仏教を支える世界—ヒンド

ゥー教—

第一章 仏教以前の状況

第二章 釈尊ブッダの生涯

第三章 思想と実践

第四章 仏教教団の成立と発展

第五章 仏教徒の生活文化

第六章 大乘仏教の興起

第七章 グプタ王朝時代とそれ以後の仏教

第八章 スリランカの仏教

第九章 東南アジアの仏教

第十章 現代インドの仏教

このうち第八章、第九章の執筆にはそれぞれ片山一良(駒沢大学助教授)、野村亨(青山学院高等部教諭、駒沢大学非常勤講師)の両氏から援助を受けたとされているが、序章を含む残りの九章(つまりインド仏教史の叙述)は著者によって独自にまとめられた部分であ

り本書の中核をなす。まず、仏教はヒンドゥー文化に支えられ、その世界を基盤として成立発展したことを述べ、仏教とヒンドゥー教とを相並ぶ二つの宗教として捉えるのは誤りだと指摘する。著者によれば「ヒンドゥー教とは、文化史的には、アーリア人のインド侵入以後、その文化が原住民諸文化と接触、融合を始めたところにその起源を求め、以降、さまざまな異文化を呑み尽くすことによって成立した大海のごとき文化の体系」（二七頁）である。したがってバラモン教とは初期ヒンドゥーの宗教的特徴（つまりバラモン中心主義）を表わす語にほかならないとし、これをヒンドゥー教から別立しない見方をとっている。これはヒンドゥー教の概念を、バラモン教をも包摂する広義のものを見なす点で、通説と相違している。

ところで著者の立場や方法がもっとも鮮明にうかがわれるのは「第五章、仏教徒の生活文化」であろう。仏教徒の生活文化の中にはレヴェルの違う二つの観念、儀礼・慣行が併存しているとなし、それを出世間と世間、あるいは実存のレヴェルと日常のレヴェルなどと呼んで区別することができる。前者はいわば仏教の本来の形態で、経論などに描

かれる仏教の姿は主としてこちらに属する。しかし仏教徒の生活文化の中には仏教にとって非本来的な観念や儀礼も少なくない。祖先崇拜の儀礼、通過儀礼さらには呪術的儀礼すらも実際にはひろく行なわれている。それが世間あるいは日常のレヴェルと呼ばれるものである。これら二つのレヴェルの観念や儀礼はレヴェルを異にするが故に両立することが可能であったと見る。著者の提唱するこうした新しいアプローチは、近來さかんになった人類学的調査・研究の豊富な成果を援用して、これまで不明な点の多かった古代インドの仏教徒の生活を具体的にきめ細かく考察することを狙いとしている。スリランカを調査したM・エームズ、ビルマを調査したM・スパイロ両教授の分析報告の一端は、本書にも紹介されているが、この問題をめぐる基礎理論や概念の枠組みは、本書の性格上、十分に展開されていない。したがって本書の叙述を支える著者の立場や方法を詳しく吟味するためには「古代インド仏教の宗教的表層と基層—アヴァダーナ・シャタカを例として—」（『三蔵』三二一・三三三・三四、昭和46）を始めとする一連の論文を併読する必要がある。

#### 四

いうまでもないことだが、在家と出家とではその生活の様相が全く異っている。日常生活を律する戒律が在家の場合は五戒、出家の比丘の場合は二五〇戒と定められているからである。二五〇戒の条文には、衣食住という生活の根幹に関する問題のみならず、生活の瑣事にいたるまで厳格な規定が存する。比丘たちは基本的にはこれを遵守し、サンガの一員として勉学や修行に励んでいたと考えられる。しかしかれらとても在家の人々と没交渉であったわけではないから、世俗とのさまざまななかかわりあいが生じ、その中で時にはその影響を著しく蒙った場合もあったであろう。また三帰・五戒を守るのみの在家者が呪術に頼ったり、ヒンドゥー的儀礼をそのまま行っていた例は少なくないであろう。こうした問題は従来まったく顧みられなかったのではないが、文献にもとづいて教理の展開を追う形の仏教史では正面からとりあげられることはなかった。本書がとくに一章を設けてこの問題を掘りさげ、仏教徒がどのような生活を営んでいたかをめぐってその隠れた裏面の事実を独自の視点から照射した意義は高く評

価さるべきであろう。とくにジャータカやアヴァダーナ文献など、従来、仏教史の叙述にほとんど利用されることのなかった資料に着目し、これらの分析を通して世間的(日常的)

レヴェルの仏教の生成過程を知る手がかりを提供してくれたことは、ひとえに著者の功績といわなければならない。功德と生天、業と輪廻の観念がどう変貌したか、誓願や祈願がどのように行なわれたか、呪術がどのように合理化されてとり入れられたか等の叙述には多くの頁が割かれ、興味ぶかい事例が報告されている。最後にヒンドゥー世界における仏教の特異な有り方が指摘されている。それによれば仏教徒といっても在家の場合は独立の社会集団を構成していたわけではなく、したがってヒンドゥー世界に十分定着していなかった。仏教はカーストを中核とするヒンドゥー世界の上に成立し伝持された。換言すれば、在家信者たちは各カーストに所属したまま、つまりヒンドゥー社会の一員でありながらしかも仏教徒と称していたという。したがって実存的レヴェルはともかく、日常的レヴェルでその観念・儀礼を見るかぎり、仏教とヒンドゥー教とは区別し難いということになる。著者によれば、最終的に仏教はその実

存的レヴェルの観念や行法(儀礼)すらもヒンドゥー教に同化・吸収され、独自の存在意義を失なっていたとする。

## 五

出家・在家を問わず仏教徒の生活全体を構造的に捉えようと試みたこの第五章が、歴史的叙述の乏しいものになったことはやむを得ないことかも知れない。しかしこの章を「佛教団の成立と発展」(第四章)と「大乘佛教の興起」(第六章)との間に挿入したことは、歴史的展開を重視すべき通史の叙述には、やや馴まないという印象を与えるのではあるまいか。とくに本章の第四節「仏教とヒンドゥー教」は、序章のテーマとも呼応しあうもので、むしろ本書全体の総結にこそふさわしい内容が盛り込まれているように思われるがどうかであろうか。

第五章と並んで「第三章、思想と実践」も注目に値する。著者はここで仏教の本義、原点ともいべきものを種々の角度から析出せんとしている。仏教の原初的な段階から、のちの大乘仏教までが広く展望されているが、しかし著者の主たる関心は教理や思想の史的展開にあるのではなく、あくまで実存レヴェ

ルにおける仏教の本義の探究にある。「大小乗の間に思想、教理の発展はあるが、仏教の本質的な部分は変わっていないものとみていい」(二二九頁)ともいう。この点については種々の議論があり得ると思うが、私の卒直な印象を述べさせていただくならば、少くともこの章に現れた著者の立場について見るかぎり、歴史のダイナミズムを追求する姿勢は後退し、変化の中に不変なるものを凝視せんとする哲学的ないし宗教的傾斜が著しく目だつことである。本章が、第四章、第六章、第七章などの歴史的叙述とどこかしっくりしない感じを抱かせるのはこのためであろう。「実存の姿」「実存的問いかけ」「人間実存の真実」「実存の世界」「実存の論理」など、実存という言葉がこの章に頻出するのも前述の姿勢と関連があるのではないか。

ところで本書のすぐれた特長の一つとして逸すことのできないのは、第四章の第五、六、七節である。ここで「岩窟寺院とストゥーパ崇拜」、「南インドの仏教」、「西北インドと仏像」がとりあげられ、インド各地における佛教団の多様な発展が詳細にたどられている。とりわけ「南インドの仏教」で、あまり知られていないこの地方における仏教の具体

的様相が紹介された意義は大きいといわねばならない。

## 六

ヒンドゥー教の世界については本書でかなり多くの頁を割いて縷説されている。なお著者にはすでにヒンドゥー教を独立に扱った数篇の論文（「ヒンドゥー教」『講座東洋思想』第一巻、昭和42、「ヒンドゥー教徒の生活」『インドの顔』、昭和50、「ヒンドゥー教とは何か」『インド入門』、昭和52）があり、また本書と同じく世界宗教史叢書にふくまれる中村元著『ヒンドゥー教史』（昭和54）も刊行されているから、それらを参照比較すれば著者のヒンドゥー教観の特徴を、よりの確に理解することができよう。また最新刊の中村元・奈良康明・佐藤良純編著『ブツダの世界』（昭和55）は、奈良氏の筆になる部分かなり多く、全体の骨子はこの『仏教史Ⅰ』に負っているように思われる。したがってこれも本書の理解に資する点が多々あるであろう。

最後に門外漢の素朴な疑問をひとつ。  
著者が本書で提示した結論のひとつは、仏教徒の生活文化はヒンドゥー教徒のそれと重なり合う領域が多く、その点では仏教徒とヒ

ンドゥー教徒とをほとんど区別しえないということであった。著者の明らかにしたこの事實は、文化的視点から分析するかぎり仏教をも最広義のヒンドゥー教に含めて考察する方がもっとも理にかなっているということにならないだろうか。しかしこれではヒンドゥー教徒の仏教観に無限に接近していくことになり、仏教史を独立にまとめる意義は失なわれてしまう。つまり「仏教文化史」は「ヒンドゥー教文化史」の中に解消される危険がある。とすれば仏教とヒンドゥー教を分ける本質は「文化」一般、「生活」全般にあるのではなくて、やはり教理・思想の独自性にあると見なさざるを得ないのではないか。そしてそのことを承認するかぎり、教理学中心の仏教史の成果をもっと積極的に見なおす必要があるのではないか。

インドの歴史的事情にくらい私が懐いたこのような疑問は、著者をふくめたインド史家の間ではとうに解決済みの事柄であるかも知れない。私は本書のヒンドゥー教に関する叙述を読みながら念頭を離れなかったのは、中国の伝統思想、とくに儒教と道教のことであった。私は中国仏教においても「中国の仏教化」よりも「仏教の中国化」の契機が大きい

と考えている。

ともあれ本書はインド仏教史に新しい視野をひらき、種々の新しい事実を明らかにしてくれた。インド仏教史はまた豊かな広がりを与えられたことになる。しかしそのみならず、文化史というとき「文化」と「史」の間に横たわる困難な問題、歴史における叙述の問題、を考えるひとつの手がかりをも提供してくれた。新しいインド仏教史として本書が多くの読者に迎えられることを心から願って、私の蕪難な書評をとじることにしたい。

（世界宗教史叢書7、山川出版社刊、昭和54、一九〇〇円、B5版、はしがき・目次一三頁、本文五〇四頁、付録〔索引・年表・参考文献〕三四頁）